鳥羽離宮跡の建築と庭園

前田 義明

Yoshiaki Maeda

京都市埋蔵文化財研究所

はじめに

鳥羽離宮の位置は、京都市伏見区竹田・中島両地区にまたがり、西は桂川、東は近鉄京都線、北は名神高速道路、南は府道伏見向日線に挟まれた東西1.2km南北1.0kmの範囲である。現在の鴨川は鳥羽離宮の西側を流れているが、当時は文献や考古学的成果から、近鉄京都線の東に沿って南向し、鳥羽離宮の南で西へ折れていたことが判明している。鳥羽離宮については、文献史料が豊富なため古くから研究者の注目を集め、庭園から森蘊¹⁾、他に角田文次²⁾・太田静六³⁾・村山修一⁴⁾の各氏の論文があり、杉山信三氏⁵⁾は建築に関して詳細な研究を残している。現地調査は昭和33年に森蘊氏によって始められた地形測量からで、広範囲な面積を実測されている。また、発掘調査は昭和35年から杉山信三氏を中心として開始された。その後、京都府教育委員会、鳥羽離宮跡調査研究所、京都市埋蔵文化財研究所に受け継がれ、現在まで140次にわたって実施され、各年度ごとの概要報告やパンフレットが公表されている。『平安京提要』⁶⁾では長宗繁一・鈴木久男の両氏が文献と発掘調査の成果を詳細にまとめている。ここでは建築と庭園を中心として述べたい。

鳥羽離宮の沿革

鳥羽離宮は洛南鳥羽の地に平安時代後期の11世紀から12世紀にかけて、約70年間にわたって白河・鳥羽両上皇によって御所と御堂が次々と造営され、院政の舞台であり中心地となったことで知られる。これに伴い庭園に関しても力が注がれたのである。造営は広範囲に及び、造営順に南殿・北殿・泉殿・東殿・田中殿と呼ばれた。まず最初に鳥羽離宮の記事があらわれるのは、『扶桑略記』の応徳三年(1086)十月二十日条⁷⁾である。九条の南の鳥羽山荘に新しく後院を建てるとあり、面積は約百余町といわれ、造営の様子は近習公卿や使用人に土地が与

図1 鳥羽離宮の位置

えられ舎屋を建て、まるで都移りのようであると記されている。7月から造営が始まったようで、備前守藤原季綱が領地を、讃岐守高階泰仲が御所を寄進した。これによって、重任を受けている。五畿七道60余州の課役によって、池が掘られ築山や島が築かれた。池は南北八町東西六町、水深が八尺余りとされる。いかに大規模な造営であったかが想像される。白河上皇が初めて鳥羽殿に行幸

年 号	西暦	記 事	文 献
応徳3年10月20日	1086	白河天皇、洛南鳥羽に鳥羽殿の造営、都移りのごとし	扶桑略記
寛治元年2月5日	1087	白河上皇初めて鳥羽離宮へ行幸	中右記、百鍊抄
寛治4年4月15日	1090	鳥羽殿馬場で競馬	中右記
嘉保2年8月28日	1095	白河上皇、鳥羽殿において前栽合わせ	中右記、古今著聞集
永長元年6月3日	1096	白河上皇、鳥羽殿以南伏見以北を院領とする	中右記
承德2年4月2日	1098	閑院の舎屋を鳥羽殿に移す	中右記
承德2年10月26日	1098	北御所（北殿）の造営が成り、白河上皇が移る	中右記、百鍊抄
康和3年3月29日	1101	白河法皇、鳥羽御堂（証金剛院）を供養する	百鍊抄、殿暦
康和4年3月18日	1102	白河法皇、五十賀	中右記
長治2年5月14日	1105	鴨川、桂川が氾濫し、鳥羽殿が浸水する	中右記
天仁元年3月23日	1108	三重小塔、供養	中右記
天仁元年6月3日	1108	白河法皇、東殿で塔の場所を見学	中右記
天仁2年8月18日	1109	白河法皇、鳥羽御塔を供養する	殿暦
天永2年3月11日	1111	白河法皇、鳥羽殿御塔を供養する	中右記
天永3年12月19日	1112	白河法皇、鳥羽東御所で多宝塔を供養する（合わせて3基）	中右記
永久元年8月21日	1113	大風雨で鳥羽殿の築垣が崩れる	殿暦
大治5年12月26日	1130	鳥羽泉殿跡、寝殿を建てる	長秋記
天承元年7月8日	1131	泉殿内に九体阿弥陀堂（成菩提院、元の三条殿西対）が供養される	長秋記、百鍊抄
天承元年7月9日	1131	白河法皇の遺骨を香隆寺から鳥羽殿三重塔に移す	百鍊抄
長承3年4月19日	1134	鳥羽御堂（勝光明院）の上棟が行われる	中右記
保延元年7月8日	1135	鳥羽御堂（勝光明院）の造園に着手	長秋記
保延2年3月23日	1136	鳥羽御堂（勝光明院）の落慶供養、宇治平等院を写す	中右記、本朝続文粹
保延3年10月15日	1137	鳥羽上皇、鳥羽東殿御堂安楽寿院を供養	百鍊抄
保延5年2月22日	1139	鳥羽上皇、鳥羽東殿の三重塔を供養	百鍊抄
保延6年12月12日	1140	鳥羽上皇、鳥羽殿内に炎魔天堂を供養	百鍊抄
久安元年12月17日	1145	鳥羽法皇、鳥羽東御所（安楽寿院）に移る	台記
久安3年8月11日	1147	安楽寿院の南に九体阿弥陀堂を供養	百鍊抄
仁平2年3月7日	1152	鳥羽法皇、五十賀	兵範記
仁平3年10月18日	1153	鳥羽新御堂（金剛心院）が上棟	兵範記
久寿元年7月29日	1154	鳥羽新御堂（金剛心院）御所造営成り、鳥羽法皇が移る	兵範記、台記
久寿元年8月9日	1154	鳥羽金剛心院供養	兵範記、百鍊抄
久寿2年2月27日	1155	安楽寿院の不動明王堂を供養する	兵範記、百鍊抄
保元元年7月2日	1156	鳥羽法皇、安楽寿院にて崩御	百鍊抄、兵範記
応保元年正月7日	1161	北殿焼亡	園太暦
仁安元年11月6日	1166	北殿新造	兵範記
嘉応2年8月8日	1170	大風により、鳥羽殿の北楼門が倒れる	百鍊抄
治承3年6月28日	1179	後白河上皇、修理後の鳥羽南殿に渡御	玉葉
治承3年11月20日	1179	後白河法皇、鳥羽殿に幽閉	山槐記
建仁元年4月19日	1201	後鳥羽上皇、鳥羽南殿修理後初めて行幸	猪隈関白記
承久3年7月6日	1221	後鳥羽上皇、鳥羽殿に移る	吾妻鏡
承久3年7月13日	1221	後鳥羽上皇、鳥羽より隠岐国に遷御	吾妻鏡
安貞元年3月30日	1227	鳥羽堤を築き、鳥羽を修理	明月記
仁治3年7月1日	1242	鳥羽勝光明院、焼亡	百鍊抄
建長2年7月27日	1250	御嵯峨上皇、鳥羽北殿に移る	百鍊抄
天正13年11月21日	1585	豊臣秀吉、安楽寿院に五百石の寺領を与える	安楽寿院文書

表1 鳥羽離宮関係略年表

したのは明くる年の寛治元年（1087）二月五日のことで、鳥羽水閣を遊覧している。

承徳二年（1098）には閑院の建物を移築し北御所を造営し、先の御所を南殿、新御所を北殿と呼ばれる。康和三年（1101）には南殿に初めての御堂の証金剛院が供養されている。

次の造営は東殿である。天仁元年（1108）六月三日には白河法皇が東殿の塔を見学している。そして白河法皇は東殿に次々と3基の塔を続けて建立する。まず天仁二年（1109）、次いで天永二年（1111）、天永三年（1112）に多宝塔を供養している。そして、このうちの三重塔の1基に天承元年（1131）白河法皇の遺骨を納め、山陵とした。これが現在の白河天皇陵（成菩提院陵）である。

また、白河法皇が崩御した御所三条殿の西対を泉殿跡に移築し、九体阿弥陀堂（成菩提院）として再建され、遺骨を納める前日に供養されている。

次に鳥羽上皇によって建立される勝光明院については、源師時の記した『長秋記』に造営の様子が上棟から供養、造園まで詳しく記述されている。長承三年（1134）四月十九日立柱上棟があり、保延元年（1135）に造園に着手、保延二年（1136）に勝光明院が供養された。

鳥羽上皇は次いで東殿に着手する。保延三年（1137）には安楽寿院を供養し、保延五年（1139）に三重塔、保延六年（1140）に炎魔天堂、久安三年（1147）に安楽寿院の南に九体阿弥陀堂を供養する。

次は金剛心院の造営である。仁平三年（1153）に上棟、

図2 鳥羽離宮の全体図

久寿元年（1154）七月二九日に御所の完成、同八月九日に金剛心院が供養される。金剛心院はその位置や建物の規模や荘厳など史料から知られる。馬場殿の北で田中新御所の南に南北60丈東西50丈の広さをもつこと。備後守家明の寄進した九間四面阿弥陀堂、播磨守顕親が寄進した三間四面釈迦堂・寝殿・東西渡殿・中門廊などの建物があったことがわかる。

安楽寿院では久寿二年（1155）に不動明王堂が供養される。次の年の保元元年（1156）に安楽寿院で鳥羽法皇が崩御し三重塔を御陵（安楽寿院陵）とした。

応保元年（1161）に北殿が焼亡し、仁安元年（1166）に再建される。鳥羽離宮はこの後修理は行われるが、新しく造営されることはなく、衰退していく。嘉応二年（1170）大風によって鳥羽北楼門が倒れる。仁治三年（1242）勝光明院が焼亡する。

天正十三年（1585）には豊臣秀吉が安楽寿院に寺領を与え復興される。その一部が数少ない地上の遺構として現在の安楽寿院が残っている。

南殿の調査

南殿は最も早く造営されているが、発掘調査においても初期に実施されている。昭和38年から41年にかけて秋ノ山の南方（中島御所ノ内町）で行われ、建物跡や庭園遺構を検出している。建物跡は雁行形に展開し、証金剛院・小寝殿・寝殿と推定されている。庭園は建物の東側の周辺で検出されている。東方が大きな池となり、その汀は部分的に洲浜を造っている。建物の北側に東から西へ向かい池へ落ちる遣水跡が検出されている。遣水は玉石を敷いたもので緩く蛇行し、所々に景石を配している。この調査地の南側の東西道路で、平成元年に実施した下水道敷設に伴う調査（写真2）でも、池の汀と景石を検出している。しかしながら、部分的な調査のため、建物の全貌が明らかにされているとはいえず、池の形状にしても未知な部分を多く残している。現在、南殿跡は秋ノ山から証金剛院跡まで史跡公園として保存され、市民に活用されている。

北殿の調査

北殿は南殿と秋ノ山の北側にあたる中島秋ノ山町・中島宮ノ後町に推定されている。南殿に引き続き造営された時期と、それから40年近く経ってから勝光明院が建てられた時期に分かれる。

発掘調査では、勝光明院と勝光明院経蔵⁸⁾（宝蔵）が明らかになっている。城南宮（馬場殿）の北側で昭和53年から55年にかけて実施した調査（第43次・45次・65次）で建物基壇と雨落溝（写真5）を検出した。雨落溝の長さは南北方向で43mを測る大規模なもので、この時点では西半が調査できていないが、後の立会調査によって東西が約34mと判明した。雨落溝の東辺中央部には梁間2間桁行3間の礎石建物が付属している。礎石建物は門に相当し、雨落溝に隣接しては礎石の痕跡を見つけることができず、先の雨落溝は建物ではなく築地に伴うものと考えられる。調査地周辺は地盤が軟弱であることから、南北52m東西43mの基壇を造る際に、それより広範囲に土を入れ替え掘り込み地業（写真6）を行っている。その工法は古代に用いられた土と砂の版築ではなく、拳大の石を用いる頑丈なものである。基壇の上に瓦葺きの築地をめぐらし、中央部に経蔵が建てられた。

経蔵は宝蔵とも呼ばれ、周囲を堀に囲まれ、南側に馬場殿との間に池がある。池の岸を検出しているが洲浜や景石は検出できなかった。

経蔵の西方では、池の延長にあたる汀を検出している。ここでは洲浜はみられないが、チャートを用いた景石を配していた。

さらに西へ行ったところで建物基壇と池の西岸（写真3）、及び二つの島を検出している。建物基壇は池の汀に接して建てられ、周囲に凝灰岩の屑が入った溝がとり囲んでいるため、この建物は凝灰岩で基壇化粧された重要な建物と思われる。基壇の上面は削平されていて、礎石痕跡を確認できず建物の平面形を探る手だてではないが、現段階ではこの建物を平等院を写した⁹⁾とされる勝光明院に比定されている。今後周辺で発掘調査できる場所が残されているため、この推定は確認できる余地を残している。その東方には池が広がっている。緩やかな勾配の汀には拳大の石をまいた洲浜を形成し、大きな景石を据えている。建物の東正面を向いて汀から50m離れた池内に島（写真4）が造られている。完全な人工の島で建物基壇のように土を入れ替えた掘り込み地業を行い、円形に盛り上げた島の周囲に石で縁取りしたものである。池の水位は標高12.40m前後を測る。島の南側には景石を据えている。もう1基の島は建物の南側にあたり、池の西岸に近い。この島の構築方法は先の島と異なり、ま

ず大きな石を周囲に据えその中に玉石を埋め、土を盛って島を形成している。

馬場殿の調査

馬場殿は『中右記』に寛治四年（1090）四月十五日条¹⁰⁾にみられる。現在の城南宮境内（中島宮ノ前町）に推定されているが、最も発掘調査の少ない地区のため、調査成果は少ない。北側で実施した池の北岸、西側の池の東岸などが判明しているが、中心部では明確な遺構は検出していない。

泉殿・東殿の調査

泉殿は小規模な殿舎のようで文献に現れることは少ない。大治五年（1130）十二月二六日の条¹¹⁾にみられるほか、天承元年（1131）七月八日条¹²⁾に泉殿内に成菩提院を供養する記事があり、白河天皇陵（成菩提院陵）一帯が泉殿であったと想定される。現段階では発掘調査で明確な泉殿の遺構を検出したとはいえない状況である。

東殿については白河法皇が3基の塔を建立する。そのうちの三重塔を後に法皇の山稜とするため、現在の白河天皇陵（成菩提院陵）から安楽寿院にかけての竹田浄菩提院町・竹田内畑町が東殿と推定されている。他に鳥羽天皇陵（安楽寿院陵）、近衛天皇陵（安楽寿院南陵）、安楽寿院、北向不動尊が現存している。

東殿の調査では建築遺構も検出しているが、部分的な礎石やその抜き取り跡を見つけているだけで、明確な平面形を復原するまで至っていない。しかしながら、庭園遺構に関しては良好に遺存していることが判明した。まず最初に昭和47年と48年（第9次・10次）で庭園跡を検出している。近衛天皇陵の南側で池の洲浜が見つかり、その後も宅地造成などで発掘調査（写真9）を実施し、ほぼその規模がつかめている。南北約130m、東西約120mの大きさの池となることが分かった。池の汀は緩やかなカーブを描き、勾配もなだらかである。池の東よりの中央部には中島を築いている。南北約70m、東西約40mの大きさで、池を掘り下げるときに削りだし、北と南が岸につながる出島となる。中島から西側の汀には、拳大の玉石を1m前後の幅でまき、洲浜を形成している。池の水位は標高

13.3～13.5mにあたる。導水路は南東部と北東部から入れ、北西部から排水していたようである。南東部は遣水を造り溝の肩には洲浜と同様な玉石を張り付けている。景石は汀や陸部に点々と配するが、小振りな石をまばらに横に据えている。島や汀近くには植栽としての松や柳の根株が見つかった。この池に接して近衛天皇陵が建っているが、御陵の南西部は池内に張り出して堤を築いていることが判明した（写真7）。白河天皇陵も堀に囲まれ、堀の内側に石積みを築いていることが分かっているが、近衛天皇陵も同様に堀で囲い、石積みを行っている。その外側が池に張り出すため、堤を築いたようである。

また、池の西側には石を積み上げて突堤状にした遺構が、昭和47年（第9次）に検出された。当初は突堤と突堤の間に舟を入れる舟入り遺構と推定されていたが、不都合な点が多く、それよりは石の積み上げの工法が、勝

図3 東殿遺構配置図

光明院や金剛心院にみられる建物基壇の工法に似ており、現段階では建物の基礎地業と考えられている。池の西岸もこの地業によって造られており、当該地の地盤が軟弱のため建物だけでなく、広範囲にわたって地盤改良を行った結果と思われる。保延三年（1137）に安楽寿院が供養されてから後三重塔、炎魔天堂、九体阿弥陀堂が次々と建立される。これらの建物のいくつかは、池の西岸に建てたのであろう。

白河天皇陵は現在一辺30mの御陵であるが、昭和58年以降の周辺の調査（写真8）で御陵を取り囲む幅8m深さ1.5mの堀がめぐっていることが判明した。堀の外側は素掘りのままであるが、内側には大きな自然石を用いて石垣を築いていた。石は基底部だけを残しほとんどが抜き取られていたが、横に寝かせて階段状に積んだり立てて用いている箇所もある。この堀までを御陵とすると一辺55mを測り、鳥羽・近衛両御陵と大差ない規模となる。白河天皇陵に隣接して成菩提院が建てられているはずであるが、発掘調査ではまだその痕跡は確認できていない。

田中殿の調査

竹田田中殿町という地名のために、初期の昭和36年に発掘調査（第2次）が開始された。拳大の石を敷き詰めた建物地業（写真10）を数箇所を確認し、地業の範囲で建物を想定しているが、礎石跡を確認できず、明確に田中殿の全体像を復原することが出来ない。苑池に関しても具体的に遺構を検出したとはいえない状況である。

金剛心院の調査

金剛心院は鳥羽離宮の中で最も調査成果の上がっている地区（竹田小屋ノ内町）である。『兵範記』¹³⁾に馬場殿（城南宮）と田中新御所の間とあり、発掘調査で検出した建築が文献史料によく一致している。当初から高い基壇上面は削平されているものの低い部分、特に庭園は良好に遺存していた。部分的に礎石や景石は抜き取られているが、遺存状態は極めて良好といえよう。廃絶後水田あるいは畑地として利用され、攪乱されなかった結果であろう。

金剛心院は仁平三年（1153）に上棟され久寿元年（1154）に供養された。検出した遺構は釈迦堂（写真11）と九体阿弥陀堂（写真13）を中心として、寝殿、二棟廊、小寝殿、釣殿廊、一間四面堂、雑舎、築地を検出した。

図4 金剛心院遺構配置図

釈迦堂は梁間2間桁行3間の東西棟で四面に庇と孫庇がめぐり、さらに南側には縁が付く。阿弥陀堂は身舎が梁間2間桁行9間に庇がめぐり、北側に孫庇と四面に縁がめぐる南北棟である。釈迦堂と阿弥陀堂は小寝殿で連結している。そして釈迦堂と阿弥陀堂の建物基壇は非常に頑健な地業を行っている。軟弱な地面を基壇の大きさに3mの幅で短冊状に深さ約1m掘り窪め、縁は拳大程度の河原石を丁寧に積み重ね、その中に石を敷き詰め突き固める。次は土を置き、さらに石を敷き基壇の高さまで何度も繰り返して丈夫な建物基礎を構築している。残っていた礎石はほとんどが風化した花崗岩で、抜き取られた穴にも花崗岩の屑が認められ礎石の痕跡を確認できた。また西側を区画する築地跡（写真12）を検出している。釈迦堂と阿弥陀堂と同じように、玉石を使った地業を行い、両側に側溝を伴っている。

池は釈迦堂の東側、釈迦堂の南東部、九体阿弥陀堂の東側の3箇所で見つかった。仮に東池、中池、西池とする。東池は南北方向に長く東北から導水し、北から出島（写真14）がのびる。出島には舟入りや景石を点々と配する。出島から寝殿の前面にかけては洲浜を形成し、その南の釈迦堂の東側は景石を多く使い荒磯風（写真15）とする。この部分には釈迦堂から釣殿廊（写真16）が汀に接するように鉤形にのびている。そしてその対岸には溝組を造る。北東の導水路につながる溝が東を画するように南北方向に流れているが、この溝から水を得て滝に

落としている。洲浜は造らず、所々に景石を配置する。西池は九体阿弥陀堂の東前面で弓形をなす。汀には玉石を敷き詰め、景石を点々と据え付けている。池の水位は12.50～.70mである。また西池では東西方向にかかる橋脚（写真17）を4本検出した。この橋は九体阿弥陀堂のほぼ中央部分に位置し、そしてその延長線上には東池の滝組があることから、阿弥陀堂の正面からみると、橋と滝が一直線に並ぶ。中池は他の池と異なり、幅10m長さ40m以上の長方形を呈し、池底の浅い特殊な池である。

まとめ

鳥羽離宮は南殿から北殿にかけて秋ノ山という大きな築山を築き、北殿には2箇所島の設けるなど広大な園池が設けられている。また建物の近接しているところでは、洲浜や景石を多く用いていることが分かり、これらの遺構を検出した地点では、近くに建物跡を想定して良いのではないか。東殿の池でも景石の集中している西側の汀付近では建物が近接して配置されていると想定される。金剛心院の園池に関しては、複雑な形状をなすことが特徴であろう。そして釈迦堂と阿弥陀堂から庭園を觀賞できるように橋・滝組・出島・景石・洲浜が要所に取り入れられているのがわかる。建物配置にしても寝殿造を意識して配置されている。

金剛心院の東池では下層に弥生時代から古墳時代の流路を検出しており、池を造る以前は自然流路あるいは湿地であったところを利用して掘り直している。これは他の池も同じことであろう。深く掘り下げると湧水があり池の水を確保できると思われる。源師時の『長秋記』¹⁴⁾には鳥羽は水難の地であるため「浄」ではなく「成」が用いられたことを記し、豊富な水に恵まれ池造りには最適であったことを示している。地業や洲浜の玉石にしても鳥羽離宮の位置が鴨川と桂川に挟まれた地点であるため、河原では都合の良い玉石を手に入れることができるのである。

眺望については本中眞氏¹⁵⁾が橘俊綱の庭園論を紹介し、鳥羽殿の眺望が悪いことを指摘されている。『中右記』の天仁元年六月三日条¹⁶⁾に白河法皇が東殿へ行幸し塔を建てる場所を見学する記事がある。その割注に「禁中全無眺望之所」とあり、全く眺望のきかない所で、鬱蒼と樹木の茂っていることが予想される。確かに鳥羽殿は高低差のない平地で高所の眺望は確保できない。だ

からこそ、緩やかな汀線をもつ広々とした苑池を設けていると考えられる。

註

- 1) 森蘊 「鳥羽殿庭園考」『造園雑誌 5-2』 昭和13年
- 2) 角田文次 「鳥羽殿勝光明院について」『建築史 6-1・2・3』 昭和19年
- 3) 太田静六 「鳥羽殿の考察」『建築学会論文集31』 昭和19年
- 4) 村山修一 「院政と鳥羽離宮」『史林40-3』 昭和32年
- 5) 杉山信三 a 「後鳥羽上皇の白河殿と鳥羽殿について」『日本建築学会研究報告36』 昭和31年
b 「鳥羽殿とその御堂」『院の御所とその御堂』奈良国立文化財研究所 昭和37年
- 6) 長宗繁一・鈴木久男 「鳥羽殿」『平安京提要』 角川書店 平成6年
- 7) 『扶桑略記』 応徳三年十月二十日条 「公家近来九条以南鳥羽山莊新建後院…」
- 8) 勝光明院経蔵の復原は鈴木久男氏（「鳥羽離宮勝光明院の経蔵」『平安京歴史研究』 1993年）による。
- 9) 『中右記』 保延二年三月二三日条 「御堂東面向前池被写宇治平等院…」
- 10) 『中右記』 寛治四年四月十五日条 「太上皇於鳥羽殿馬場、初有内競馬事、未刻許渡御馬場殿、…」
- 11) 『中右記』 大治五年十二月二六日条 「此殿、故院崩御後、破彼御在所西対、被立鳥羽泉殿、…」
- 12) 『百鍊抄』 天承元年七月八日条 「鳥羽殿泉殿内九体阿弥陀堂供養成菩提院是也…」
- 13) 『兵範記』 仁平三年十月十八日条 「鳥羽東新御堂棟上也、…件所馬場殿北、田中新御所南、大路南、往古田中也…」
- 14) 『長秋記』 天承元年八月二十日条 「…鳥羽水難の地也、不用三水字、就中浄字是争水也、…成菩提院、於御墓所名尤大切也…」
- 15) 本中眞 「橘俊綱の名園選考基準（「地形」と「眺望」について）『造園雑誌』 55-1 1991年
- 16) 『中右記』 天仁元年六月三日条 「…鳥羽東殿、御覽可被立御塔之所、禁中全無眺望之所、…」

写真1 鳥羽離宮跡の航空写真（南西から）

写真2 南殿、道路の下で検出した景石

写真3 勝光明院、基壇と園池（東から）

写真4 勝光明院、東側の島（南東から）

写真5 勝光明院経蔵の東門築地（東から）

写真6 勝光明院経蔵の基壇地業

写真7 東殿、近衛天皇陵の堤（南西から）

写真8 東殿、白河天皇陵の堀（北西から）

写真9 東殿、池の洲浜（南西から）

写真10 田中殿、建物地業（西から）

写真11 金剛心院、釈迦堂と二棟廊（北から）

写真12 金剛心院、築地（南から）

写真13 金剛心院、九体阿弥陀堂と西池の洲浜（東から）

写真14 金剛心院、東池北半部（西から）

写真15 金剛心院、東池石組（北から）

写真16 金剛心院、釣殿廊と石組（南西から）

写真17 金剛心院、西池の橋脚（北西から）

写真18 金剛心院、東池の舟付き場と滝組（北西から）